

# せながわむし

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第二十号（毎月一日発行）  
平成三年五月一日

## 明治初期の古平の農業

近 藤 せ方 一

午年（明治三年）に旧運上家の帳役（会計係）が、「古平場所去る巳年（明治二年）より新

古畑坪数書上」という記録を役所に報告したものが残されている。それによると、古平場所の

古平場所去る巳年より新古畑坪数書上 明治三年

字チヨヘタン 四〇〇坪 但シ此内六〇坪ハ未年開発仕候

□右者運上屋開発場所□□候

字ヘロカルウス 一二五坪

字メナシトマリ 一二五坪

右者番屋並土人開発場所二御座候

字オタスツ 一二五坪

字ラルマキ 一二五坪

右者前同断（上と同じ）

字弁財トマリ 四〇〇坪

字メメタレ 三〇〇坪

右者出稼之者開発場所二御座候

字オタニコロ 三四五〇坪

字古平川 六八四七坪

字古平川畑 三五五〇坪

右同

畑地を、一五四四〇坪（開墾）と計算している。その内訳は、古畑二〇〇坪・新畑一五八四七坪としている。この古畑・新畑の区別については不明であるが、人口の増加と共に畑地も広がっている。

このころはまだ農業を、本業とした人たちはいなかったようである。漁業のひまな時に、自家用として開墾していたようである。

上の表では、オタニコロ（浜町）・古平川・古平川畑、これらの地名はいずれも古平平野の一部である。合計すると一三八四七坪という当時としては膨大な畑地として開発されていた。

武四郎が、西蝦夷日誌に「肥沃にして畑地によろし」と記しているように、その当時から畑地として注目されていたようである。

## 古平町（西部方面）の大火（昭和二十四年）

### 一面焼け野が原の惨状 そしてたくましく復興

昭和二十四年五月十日午前十一時三十分、風速十五〜二十位の季節風、気温二十六度前後、湿度が四十%という中で突如として火災が発生した。

強風下ではあったが晴天に恵まれ、古平中学校では春の遠足の日であった。美国の坂を登りつめたあたりで、吹き上げる黒煙を望見している。

強風にあおられ、漁家では配給になった重油を保管していた所も多く、まさに火に油、木造の建物はまたたく間に煙に包まれ延焼していった。

前日から『防火強調週間』が始まり、消防団員は早朝から警戒に当たっていたが、火の手が上がるとみるみる火勢はし（熾）烈になり（次ページ下段へ）

「△7日は、しんかな日」 つづく

## 男の世界・鉦山で

### 「はばをきかす親分」

稲倉石鉦山滝の沢詰所には、北さんという柔道何段とかで、無口な、肩幅のがっしりとした青年が常勤していた。また、太田さんといってたが、（北さんよりふた回りも大きい？）その昔、アマチュア横綱を張っていたという相撲のスーパースター

を幾度も見たことがある。

会社側も、そうゆう親分にはそれなりに交渉相手として、労務管理をしてたような時代でもあった。

今の暴力団よりどこか人情味があつて、親分もよく自分の面倒をみていた。団結心が強く、鉦山道らしき規律があつた。当時、まだへ山札は無かつたし、朝鮮半島からの労務者も来ていなかった。



もいた。

そのころの労務課には、柔道・相撲の猛者、元新聞記者・元警察官といった外の職業から転向してきた人がワンサといた。やくざの幹部上がり等々、なにも珍しくはなかった。

尾崎士郎の小説『人生劇場』ではないが、親分が自分の鉦夫を取り締まっていた。その鉦夫たちが、喧嘩でドスを抜いたの

### 隣町同志で大猿の仲

#### 『ブダ・ベゴ戦争』

あの時代（昭和ひとけた）、どうして美国の人を見ると「ベゴ、ベゴ（牛）」といって喧嘩をふっかけ、向こうも、古平のことを「ブダ、ブダ（豚）」と言いつつのか分からない。しかし、何か対抗競技でもあ

ると、かならずこのブダ野郎とか、ベゴ野郎とか言い合つて、勇ましい喧嘩になる。『ブダ・ベゴ戦争』は繰り返された。

ごく近い隣町なのに、日常の言葉やアクセントも少し違ふ。今でもそうだが、美国の人は美人？　だと評判だった。秋田美人というのと同じでネ。残念ながら、なぜか古平美人？　とは言ってくれないようだ。

競技会があると、会場にサキリやむしろで小屋掛けをした。小さかった私は、先輩におだてられ、サキリやむしろ運び、ライン引きなどを手伝った。私も早く選手になって、あのテープを切る輝かしい姿を想像して、小さい胸をときめかしていた。早く走る、高く飛ぶ、遠くへ投げる、なんて素晴らしいことか。小さいころから、日本記録・世界記録や選手の名前などはよく記憶していた（ろくに勉強もせんと）。

しかし、人生明日があつて、感動があつて、楽しからずや。

つづく

（前ページより）消防車も炎上し、消防団員の身にも危険が迫る激しさであった。

猛火は、四時間ほどで西部方面を総なめにした。火事による損害額は実に十二億円と見積もられている。焼失家屋七二一棟  
罹災世帯五二一戸（三一％）  
罹災者三〇七七人（三五％）  
という大惨事であつた。当時の町予算のざつと二十倍を超えるこの惨状を見て、「……古平町の復興は不可能」と報じた新聞もあつた。また、本州からの疎開者で、「空襲の悪夢を思い出した」という人もいた。

しかし、その後の目覚ましい復興ぶりには、かつての大惨事を忘れさせるものがあるが、大火を体験した人には、忘れられない辛い思い出として残っていることであろう。焼けただれた石垣や、猛火をくぐり抜けて残った石蔵が、今僅かにその名残りを留めているだけである。

この大惨事を招いた火事も、結局、「出火原因不明」ということで終わっている。

## 時代にふさわしい活動を

考えてみますと、創立当時より社会の情勢は大きく変動しました。交通機関が発達し、テレビなどの普及によって、個人の考え方や要望も多様化してきました。年々高齢化社会へ進むこの時代に、会の活動もまた時代と共に変わってきました。地域特有の基盤産業で働く会員をかかえ、これからの婦人会活動にはさらに努力が必要です。

二葉会は、地域に即応した実践活動を続けてまいりました。婦人会の基本方針である「健康で豊かな古平町を築くために、婦人の能力を生かしましょう」の言葉どおり、生涯学習を重要視し、研修会や各種大会、ボランティア活動にも積極的に参加してきました。今、この三十周年を契機として、二葉会発展のためにますます邁進しなければなりません。

と考えております。

創立以来三十年の長い間、ご指導ご支援をいただきました。関係者各位に深く感謝申し上げますと共に、今後いつそこのご指導ご鞭撻のほどを重ねてお願い申し上げます。

(三十周年記念誌より  
前会長 本間喜美子)

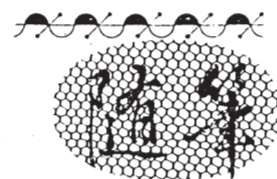
## 二葉婦人会の歩み

### 今後の会発展のために

- ・ 会員が高齢化するなかで新入会員が少ない
- ・ 時代の流れとして、会員の求めるものが多様化してきた
- ・ 会員の出席率が次第に落ちてきている
- ・ 職場の関係で、会合や行事などの日程が取りにくくなった
- ・ 同好会的なグループに集まりやすく、そのため新入会員が少ない

新しい時代の要求にあった、魅力ある会の運営に努めたい。

(二葉会会長 服部栄子)



## 古平(一) 離郷

士口 川 美我 雄

ていて、海軍に召集された。横須賀に行く前の晩、大勢の人達が集まって来て立振舞とかをやってくれた。みんなは口々に

どんな理由にせよ、ふるさとを離れるということはイヤなものだ。

一時的な旅行などではなく、いつ帰って来れるか分からないどころか、その当てさえ無いとなると、それはもう胸を締めつけられるほどの苦しさ、哀しさが襲いかかってくる。

高等小学校を卒業して、ひと呼吸するひまも無く、札幌の書店に「奉公」に出たのが十四歳の春。見るのも初めて、ロクに話しだって聞かされたことの無い、今までの私にとって無縁の世界。まるで外国に一人で旅立つような不安で、このふるさとにしがみついて泣き叫びたい気持ちであった。

二度目にそれを経験したのは十八年の夏。私は二十歳になっ

「立派に死んで来い」とけしけながら大酒を飲んだ。いちばん若い叔母だけが、私の耳許でささやいた。「あのなア。死んだら駄目だぞ、どんなことがあっても生きて帰って来い」

余市までの定期船がセタカムイを過ぎるころ、見送りの漁船の航跡が弧を描いて順に帰って行き、私は刻々と変貌する故郷の山々を見つめながら、「俺は必ず帰って来るぞ」と、深く誓った。

昭和二十一年の夏。私は南の戦場で毎夜想い続けた故郷の船着場に、定期船からヒラリと跳び下りた。

つづく

(札幌市在住・以前にも原稿をいただきました。『随筆』古平』として、連載いたします)

# 『女の出しやばり』と言われても 情熱で 保育園開設の感激

中村 トク

「自分の子どもに幼児教育を受けさせたい」という強い願望から何も分らず、伊藤町長さんにお願したところ、「今は町の水道工事が優先するので少し待ってほしい。」ということでした。

しかし、それも待ちきれず、同志のお母さん方と町内を一軒ずつ歩き回り、多くの方の賛同を得て、準備委員会の開催にまでこぎつけました。ある町議からは、「女のくせに出しやばって掻き回す」と、叱られたこともありましたが、そんなことは意にも介しませんでした。

「前会長中村トクさん、嶋稜子さん等と、吹雪の中でも、町内の方からのご理解を得るため歩き回りました。『子どもたちのため、浜町にも保育園を』という情熱が私たちをかきたてた

のです。」

（前副会長 福津玲子）

今で言う『草の根運動』でしょう。こうして昭和三十九年四月、『浜町保育園』として開園を迎えた時の感激は、終生忘れることは出来ません。

小学校から、お下がりの机や

## 『火事と寝た子は起こしちゃんらぬおこしや近所をさわがせる』

火災予防の自衛のため、東部・西部火災予防組合が組織されていて、時の道庁長官から表彰も受けている。特に東部火防組合では、五月七日を浜町大火記念日として、祈願祭や町内パレード等を年中行事として行っていた。古平町の二度の大火は、いずれも五月に発生している。火災予防への意識を新たにしましょう

《浜町十八人》

大正八年五月七日、午後七時四十分、古平座から映画上映中にフィルムに引火して出火。強風のため各所に飛び火して、中

椅子をリヤカーで運び、とにかく柔道館で開園することになりました。初代園長の高橋まつさんには大変なお世話になり、当時、町議の蓮実光明さんからは強力なアドバイスをいただきました。今にして思うと、若いパワールの結集以外のなにものもでもなかったと思います。

（古平新生婦人会創立四十周年記念誌より抜粋・元会長）



## 真冬の沖村山中で

### 《熊》撃ちの武勇伝

昭和七年一月十三日、浜町館岡重助が沖村山中に深く入り、折から冬眠中の三頭の熊を見つけてこれを射殺した。

前年は、東北地方から北海道にかけては冷害に見舞われ大凶作、鯨も凶漁、人も、熊にとっても大恐慌の年であった。

昨年からは、春の熊の駆除は動物保護の上から禁止になった。『熊との共存』を考える時代になったのである。もうこんな武勇伝は聞かれまいだろう。

### 資料の借用とご寄贈

★『浜だより』古平漁協発行  
★『ふるひら広報』

高見 久夫さん

★三山神社関係帳簿 五点

北楯 幸男さん

ありがとうございます。